
ヨモツヘグイ

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モツヘグイ

【Zコード】

Z9563

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

雨が降りしきる夜のこと。

会社帰りにタクシーを利用した男。

運転手のおじいさんは、好々爺で交換がもてた。

そんな老運転手は、男にアメを勧めた。

「お客さん、アメは好きですか？」

「雨が強くなつてきましたねえ」
ハンドルを握りながら、窓の外を見て年老いた運転手はそういった。

その言葉につられて、私の窓の外へと視線を向ける。確かに、乗り込んだときよりも強くなつていた。

「本當ですね。こつこつ口は、お仕事大変でしょ?」
私はタクシーの運転手へとそう話かけた。

仕事が遅くなつてしまい、おまけに雨まで降りだした時は憂鬱な気分になつてしまつたが、こうしてタクシーを拾つことができたら、運がよかつたのかもしれない。

「そりやあねえ……びしょ濡れで入つてくるお客さんもいますし、酔つ払つてる方もいますからね。」

うつかり戻しちやつたりしたら、後が大変ですよ。おつと、失礼」
陽気に話す運転手は、いい印象を受けた。むつつりと黙つて運転する人よりも、こうして話かけてくれるよつた運転手の方が、乗つていてこちらも気楽になれる

ましてや、週末の残業明けはくたびれているもの。仕事に集中していたから、無性に誰かと話したくなる。

「大丈夫ですよ。仕事、どれくらいされているんですか?」
「もうずいぶんと長いことやつてるよ。どれくらいかなんて忘れちゃつたけどねえ」

そういうと運転手は、車を走らせることに集中はじめた。

雨のせいでも普段よりも暗い中を、車が静かに走つていく。すれ違う車の数は少なく、眩しいくらいのライトが通り過ぎてゆく。坂道をぐだつていくよつた、緩やかな感覚があった。

家につくまではまだ少し時間があるだらう。

仕事疲れと暗さのせいで、私はだんだんと眠くなつてきいていた。
少しごらいなら……平氣だらう。

やう思い、私はゆつくりとまぶたを閉じた。

「お密やん、お密やん。ちよつと起きてくれださこな

「私に呼びかける運転手の声で、意識がはつきりとした。

さきほど田をつぶつてから、どれくらいの時間がたつたのかわからぬ。もしかしたら、数分しかたつてないのかもしない。

まばたきをしながら、運転手へと返事をした。

「悪いね……うつかり眠つてしまつた。どうしたんですか？」

「それがねえ、どうも交通事故があつたみたいでねえ。見てくださいよ

」そつこつ運転手の言葉につられて、フロントガラスから路上を見た。

救急車やパートカーなどが集まつていて、通行止めになつていて。

ずいぶんと派手な事故だつたようだ、べしゃべしゃになつていて

一台の車を見ることができた。

雨に流されてしまつたのが、血痕などを見るひとはできなかつたが。

何にしても、そのまま道を通ることはできなかつた。すぐ

に通行が復活するとも思えない。

「こりやあ、迂回するしかないでじょうねえ。それでいいですかい

？」

「ああ。それで頼むよ」

わからました、といい運転手は車を走らせた。迂回するから、普段よりも遅くなるだらうと思つた。

家にいる妻に連絡しておこつと思つたが、携帯の電波が珍しく圈外になつていた。

仕方なく諦めた私は、窓の外を眺めることにした。うたたねしたせいか、眠気は去っていた。

何故か私は、さつきの事故にあつた人は大丈夫だろうか、などと考えていた。他人事だというのに。

気のせいかもしれないが、最近よく交通事故を見かけることが多い。ただの偶然なのだろうが。

「最近、交通事故が多いですね。余所見でもしてるんでしょうか」

いきなり私の話にも、年老いた運転手は返してくれた。

「若い者はしつかり運転しないですからねえ。そればかりじゃあなた

いでしょうけれど。まあ、思うに寂しいんじゃないですかねえ」

「寂しい……誰がですか？」

「事故でなくなつた人とかですよ。自分がだけじゃ寂しいから、呼んじまつてるんじゃないかとねえ」

それはとんでもない話のようでいて、どこか納得ができそうだと私は思った。

「どことなく、老運転手は寂しそうな雰囲気を漂わせていた。

「そういう人も、いるのでしょうか……」

「さあねえ。ただのおじさんの戯言ですよ、お姫さん」

そういうと運転手は、顔をくるりとこちらへと向けた。

前を見なくていいのかと一瞬ヒヤリとしたが、一応道は見ているようだった。

「そうだ、お姫さん。アメは好きですか？」

アメ、という言葉を聞いて、なんのことだろ？、と少し考えてしまつた。

今外は雨が降っているけれど……私は別に雨は好きではない。

私が答えるより先に、運転手は言葉を続けた。

「いつもねえ、アメは持ち歩くよつにしてるんですよ。小さいお子さんとかも多いですしねえ。あげると、ここにこ笑つてくれますからねえ。で、アメは好きかい？」

その言葉で、私はお菓子のアメだということに気が付いた。

私はあまり甘いものは好きではないのだが、妻はよく好んで食べている。

「ええ。それなりには好きですよ」

「そうかいそうかい。それじゃあ、お密さんにもあげましょうねえ」嬉しそうに微笑みながら、運転手は片手で私に包まれたアメを一粒渡してくれた。

その顔は、孫や小さな子に優しくしてあげるおじいちゃんそのものといった感じだった。

「どうも。これは苺味ですか?」

透明なセロファン越しにみえるアメの色は、鮮やかな赤色をしていた。大抵は、苺味だろ。

「それは食べてみてからのお楽しみですよ」

以前として老運転手はにっこりしてくる。よっぽど機嫌がよくなつたのだろう。

「ああよかつた。お密さんによつては、受け取つてもらえなかつたりしますからねえ。

そういうときなんかは、後でとつても悲しくなつたりするんでねえ

「それはよかつた」

相変わらず、雨は降り続いていて。家まではもう少し時間がかかりそうだつたけれど。

人のいい運転手のおかげで、私は退屈しないで済みそうだと思つた。

その後も、私は家につくまで運転手と話を続けていた

次の日。私は休日を家でゆつぐと過ごしていた。

家とはいっても、マンションの一部屋でしかないのだけれど。リビングからは、妻が食器を洗つていてる音が聞こえた。それに混

じつて洗濯機の回る音も。

いついつ音を聞くと、なぜかはわからないが落ち着いてしまつ。先日運転手にもひつたアメは、昨日の夜にテーブルの上に置いておいた。

妻は寝ていたので、起こすのも忍びないと思つたからだ。甘党な妻のこと。きっと包みをとつて、口に放り込んだ後だらう。私はとこゝと、自室で読みかけの本を読んでいた。妻を手伝おうかと思つたのだが、てきぱきとこなしてしまつので、必要がないのだ。

お気に入りのピンクのエプロンをしながら、実に楽しそうに彼女は家事をこなしてくれる。

そうしてしばらぐ本を読んでいると、妻のノックが部屋のドアを叩いた。

「わたし、洗濯物干してゐるからね

「わかつた。よろしく」

ドアを開けることはせずに、声だけがドア越しに聞こえた。

私たちはいつもこんなようなものなのだ。べたべたしてゐるわけでもないが、さめきつてもいない。

つかずはなれずのこの場所が、心地いい。

洗濯物は妻に任せて、私は本を読みすすめた。

そう薄くはない本だつたが、読みかけといつてもあつて、早く読み終えてしまった。

本を棚へと戻してから、私はリビングへと向かつた。

集中してゐる間は気づかなかつたが、ひどく喉が渴いていた。

部屋を閉め切つてゐたせいで、空気が乾燥してしまつたのだろうか。

冷蔵庫を開けて、一番上の棚においてある缶ビールの開けるとい音がした。

昼間からビールと飲酒できるのも、休日のことじろだりつ。ゆつくりと酒を飲んでいると、救急車のサイレンの音が聞こえた。かなり近くから聞こえる。

しかもだんだんと音が大きくなっていることから、一いちの方面へ向かってきているようだ。

ベランダを見ると、妻の姿は見えずに、洗濯物だけがひらひらと風に揺れていた。

浴室にでも戻つたのだろうか。

おおかた、交通事故だと、車が突つ込んだとかそのあたりだろう。

サイレンの音はなおも近づいてきている。そしてマンションの前あたりで音は止まった。

誰か怪我でもしたのだろうか？

普通は見ないほうが多いのだろうが、気になつてしまつてベランダから下をのぞいた。

救急車はマンションのまん前に止まつていて、担架を下ろしていふところだった。

救急車から目線を真下へと映して、私は凍りついた。今見たものが信じられなかつたのだ。

ベランダを足早に出て、妻の浴室をノックした。……返事も、物音も聞こえなかつた。

背中を嫌な汗が伝い落ちて気持ち悪い。

急激なめまいでふらふらとしながらも、再びベランダへと戻り、下を見た。

壊れてしまつた人形のよう、折れ曲がつてしまつた手足。無造作に散らばる黒い髪。

見覚えのあるピンクは、にじみ広がる赤のせいで変色していた。顔までは見えない。見えなくても、あれが誰なのかは解る。

救急隊員が担架に乗せて、妻を運んでいく。

マンションの3階から落ちて、助かるとは思えない。

あわただしく救急車が去り、その場には赤い血溜まりが残された。呆然と見つめる私の視界に、ひときわ鮮やかに何かが目に映つた。それは、老運転手にもらった飴玉に似ていた。

どうしようもない虚無に支配されて、私はへなへなとベランダに座り込んだ。

一人取り残された私の耳に、玄関をノックする音が聞こえた。

(後書き)

はい、お読みくださいありがとうございました。

テーマは、タイトルのとおりです。
元は、イザナミの話でしたか？ 神話系統だと思いますが。
彼にしろ、オルフュウスにせよ、妻を取り戻せないのはいつしょ
すねえ。

根の国のものを食べてしまつたら、同類になるしかないのです。
結局のところ、やつこいつことです。

お読みくださいありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9563j/>

ヨモツヘグイ

2010年10月8日15時24分発行